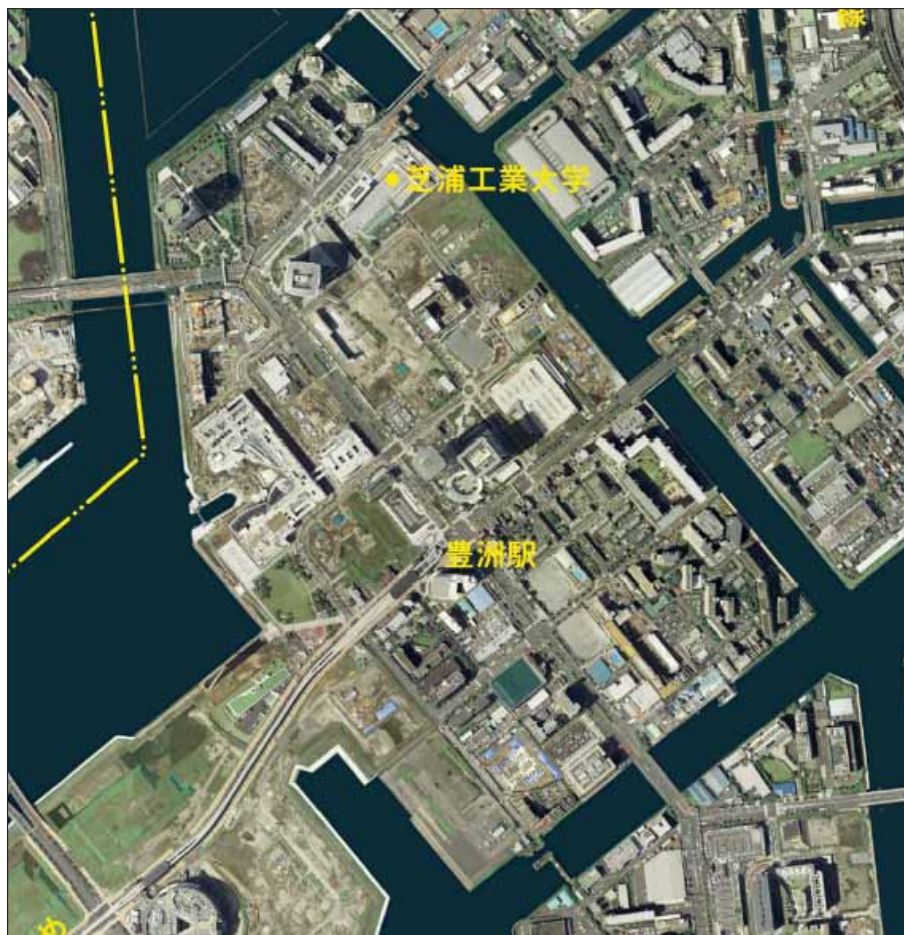


豊洲地区運河ルネサンス計画書



(平成18年)



平成21年6月

豊洲地区運河ルネサンス協議会

目次

1 目標・基本方針	1
2 位置・区域	2
3 運河ルネサンスによるまちづくり構想	3
4 水域の利用に関する構想	4
5 実現に向けて(具体的提案)	5
(1) 水辺のにぎわい空間の創出	5
(2) 大学との連携による親水空間の創出・研究	6
(3) 小学校、保育園等との連携による活動	7
(4) 多様な施設が複合する空間の形成	8
6 他の地域への波及する拠点となる活動をめざして	9

1 目標・基本方針

東西に荒川と隅田川が流れ、南は東京湾に面し、河川や運河が縦横に走る江東区は、豊かな水辺環境に恵まれた地域である。そのため、防災と環境に配慮しながら、水辺の環境を活かし、親水公園、水辺の散歩道など住民と一体となって整備を続けている。

豊洲地区周辺は、かつて江戸湊と呼ばれ、舟運により全国各地から農作物や特産品が集まり、河岸には蔵が軒を並べ、そこで働く多くの人々で賑わっていた。明治時代初期に商船学校、その後、巨大な造船工場が建ち、長きにわたり、豊洲から世界の海へさまざまな船が旅立っていくなど、この地は常に水辺との関わりの強い地域であった。

近年、世界中への情報発信基地であるテレコムセンターや市民交流、国際ビジネス・ネットワークの拠点となる国際展示場、国際試合も行われる有明テニスの森公園など多彩な施設が存在する。

また、大規模な商業・業務施設の開発により、「豊洲」の地名が広がるとともに、大規模マンション建設に伴い、子育て世帯を中心として急速に人口が増え、若い活力あるまちへと変貌した。

このように、豊洲地区は、水辺に関わる産業・文化の伝統が根付く一方で、新しい都市として発展している地域である。このため、豊洲地区の運河ルネサンスの取り組みでは、水辺を活かした「ふるさと豊洲」のまちづくりを目指すものとする。

運河ルネサンスの目標

水辺を活かした「ふるさと豊洲」のまちづくり

運河ルネサンスの基本方針

- 《 水辺に開かれた賑わい空間づくり
- 《 運河沿いプロムナードの周遊する親水空間づくり
- 《 地域が主役の水辺のまちづくり
～だれもが責任をもって、主体的に活動します～

2 位置・区域

対象とする地区は、豊洲運河、東雲運河、春海運河によって囲まれた下図の区域（陸域、水域）とする。

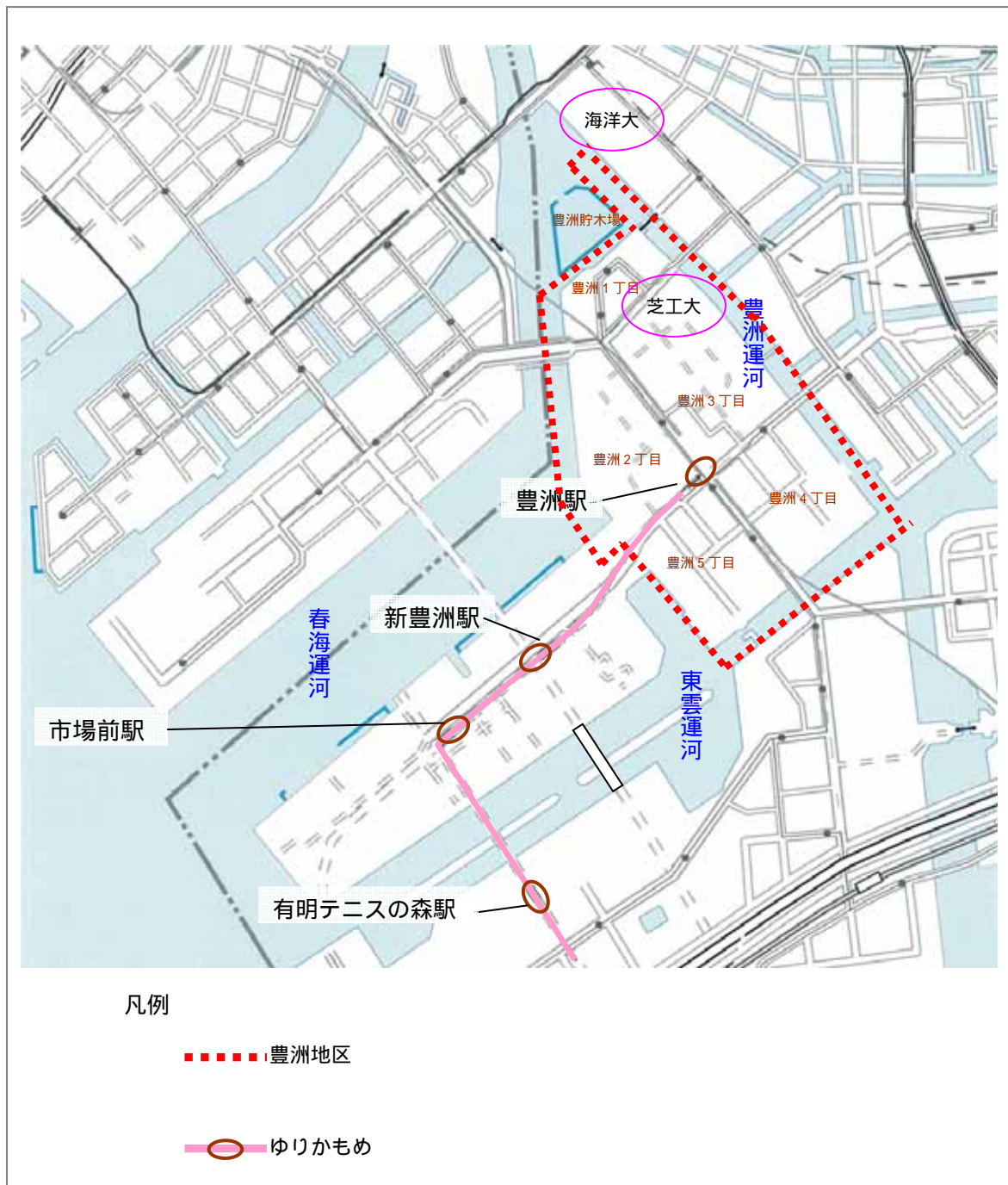


図1 豊洲地区周辺における計画・開発動向

3 運河ルネサンスによるまちづくり構想

運河を活かした景観づくり

地域を特徴づける運河を軸として、地区全体を親水空間と位置づける。ランドマークのライトアップなど、新たな観光スポットとなる魅力的なウォーターフロントの景観を演出するため、行政機関等をはじめとした各種団体に働きかける。



水辺の賑わいの創出

かつての江戸湊で見られた人々の賑わいを取り戻すべく、水辺を活用した各種イベント等の実施をし、居住する人々、働く人々、遊びに来る人々など、地区に関わる多くの人々によって水辺の賑わいを創出する。



多様な人と組織の連携

大規模な再開発により新たな住民や企業が増加する一方で、古くからこの地域に住む住民や既存の地域組織、大学も存在することから、様々な人と組織が連携し、イベント等を通し一体となったまちづくり、地域おこしを推進していく。



江東区と大学の包括連携協定調印式の様子
(平成19年11月)

親水ネットワークの形成

水辺との関わりの強い地域の特徴を活かし、運河沿いの回遊性の確保、水辺への歩行者動線の確保により、陸上から水上へのスムーズな連絡など、様々な形でのネットワークの形成を関係機関に働きかける。



4 水域の利用に関する構想



緑字：ソフトへの取組の構想、赤字：ハード整備の構想

5 実現に向けて（具体的提案）

（1）水辺のにぎわい空間の創出

地域住民及び来訪者が水辺を楽しみ、水辺に親しみ、水辺で憩えるように、安全に安心して楽しく近づける運河や親水プロムナードの整備を推進する。

このため、運河沿いの遊歩道の未整備区間の整備を図るとともに、橋による不連続箇所について桁下空間等を利用して連続化を図ることにより、地区全体の回遊性を確保していくよう関係機関等に働きかける。また、運河に沿った緑化や橋等のランドマークのライトアップなど、良好な環境を創造していくよう関係機関等に働きかける。

地区内の開発により多種多様な建築物が建設されており、住居系の建築物には多くの居住者が入居し、業務系の建築物には多くの企業が入居している。このため、地域住民や地域企業の参画のもと、親水プロムナード側やプロムナードに結びつく区間において、新築や改修の建物の際は景観調和をはかるよう関係機関等に働きかけていく。また沿道の緑化等の調査・研究を推進するよう関係機関等に働きかけていく。



運河沿いの遊歩道のイメージ



回遊性の確保イメージ



隣接建物との一体的な整備(芝浦工業大学前)

(2) 大学との連携による親水空間の創出・研究



大学との連携活動のイメージ

江東区と学校法人芝浦工業大学、国立大学法人東京海洋大学は、教育、文化、産業、まちづくり等の分野において協力することにより、相互発展と活力ある地域づくりを図り、もって区民福祉の向上に寄与することを目的として、平成19年11月に包括協定を締結した。東京海洋大学には船着場がある他、ボートの実習等を実施しており、芝浦工業大学でも運河クルーズを実施するなど、両大学と運河との関わりは大きい。

これら地元大学との連携による具体的な取り組みの一つとして、オープンカフェなど新たな親水空間を創出するとともに、かに引越し作戦・水質浄化実験など環境対策等の様々な研究・実験フィールドとして運河を大学等が活用できるようにする。



芝浦工業大学との連携した活動の拠点づくり

(3) 小学校・保育園等との連携による活動

豊洲地区周辺では、近年、子育て世帯の増加により、幼年人口が急増し、小学校を平成 19 年に 1 箇所、また、平成 25 年度 1 箇所（予定）を新設し、既存の小学校と合わせて合計 3 箇所となる予定である。また、未就学児も急増しており、認可保育園等の子育て支援施設を多数新設しているが、依然として、待機児童数は多い。

このような状況の中、若い世帯が多く、子どもたちが多数いる豊洲地区の特徴を活かして、小学校や保育園等の水辺に関する活動行事等との連携により、次世代を担う子どもたちが水辺に親しめるようにする。一方で、運河ルネサンスの活動においても、子どもたちに魅力のある活動を企画し、「子どもたちの参加 = 親の参加」を図り、良好な地域コミュニティの形成を推進していく。



江東区セーリング部活動(豊洲北小学校が拠点校)



水辺に親しむ体験のイメージ

(4) 多様な施設が複合する空間の形成

アーバンドックは、産業遺構であるドック跡地をシンボルとした水辺の街として整備され、その中に設けられたショッピングセンター・ららぽーと豊洲には、物販店、飲食店、文化・娯楽施設など、各種の商業施設が集積しており、連日、多くの人々で賑わっている。

これらの商業施設は、ウォーターフロントの立地を活かしたものであるが、さらに運河との親水性を高めるため、これらの商業施設と連携して民間によるオープンカフェ設置を誘導する。オープンカフェは、水辺の景観を特徴づけるとともに、より多くの集客に結びつく話題性を提供する存在として期待される。



運河との親水性を高めるオープンカフェのイメージ



夢の島ヨットハーバーから豊洲方面を臨む

6 他の地域へ波及する拠点となる活動をめざして

(1) 観光資源となるような活動



深川さくらまつり(大横川)

豊洲地区から伝統と文化が色濃く残る深川の拠点である門前仲町までのエリアを総合的に捉え、合同のイベントを実施したり、船での観光客の輸送などを企画する。

また、他地区の運河ルネサンス協議会とも連携を図っていく。

(2) 区内の水辺地域との連携

豊洲地区の周辺では、今後も豊洲埠頭、有明、東雲、潮見、越中島地区等でも大規模なまちづくりが行われる。これらの地区においても、運河ルネサンス導入にあたっては積極的に協力する。河川区域内のまちづくり時においても、水辺を活かしたまちづくりを積極的に推進し、豊洲地区との連携を働きかける。



隅田川からみた東京海洋大学と国指定重要文化財明治丸

(3) 水上交通、地域モビリティ等の社会実験



門前仲町駅近くの既設の水上バスステーション

江東区内には、7箇所の水上バスステーションがあり、また、新たにこの豊洲地区においても船着場を設置する予定となっている。これらの水上バスステーションとの連携を図りながら、地域の特性を考慮した新たな舟運等の検討するよう働きかける。

